江熙の論語説について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5868

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大妻国文　第45号　2014年3月

江熙の論語説について

高　橋　　均

はじめに

本稿は、先の「江熙の論語説と『集解論語』十巻」(「大妻国文」第44号）に続くもので、江熙の論語説について検討を進める。

一　江熙の論語説が何晏『論語集解』と一致する場合

江熙が自らの論語説を作るに際して、何晏の論語集解（以下「集解」と略す）は越えるべき大きな山であったに違いない。そのためであろうか、集解に対してしばしば異論を出しているが、時には何晏の集解とほぼ同主旨のことを述べる場合、あるいは集解を引き継いで補足し論を展開させていることもある。まず取りあげるのは資料（３）[(1)]である。

（３）　子夏問孝、子曰色難、有事、弟子服其労、有酒食、先生饌、曽是以為孝乎。（為政）

（集解）　馬融曰、孔子喩子夏曰、服労先食、汝謂此為孝乎、未足為孝也。

（江熙）　称或曰、労役居前、酒食処後、人之常叓、未足称孝也。（義疏）

この章が日常における孝について述べているからであろうか、集解に引く馬融の説は、「服労先食、汝謂此為孝乎」(労に服すること先に食すること、お前はそんなことを孝と考えるのか）というのに対して、江熙は、「労役居前、酒食処後」(労役は先に、酒食は後に行う）と、「弟子」の立場に立って先後にポイン

トを置き、注釈的にことがらをより明らかにするが、異論を出しているわけではない。さらに結語も、馬融が「未足為孝也」といい、江熙は「未足称孝也」とほぼ同じ表現を用いていて、集解に対して異説を出しているわけではない。ただ江熙の説は「称或曰」(ある人の説に)というように、他者の説を江熙が引いたものである点は注意を要する。しかし「或」の説であれ、江熙はその説に同意してここに引いているのである。

このように江熙が集解と同意の説を述べるのは、馬融だけに限らない。資料(50)を見てみよう。

(50) 子曰、邦有道、危言危行、邦无道、危行言遜。(憲問)

(集解) 遜、順也、厉行[(2)]不随俗、順言以遠害也。

(江熙) 仁者豈以屮寒虧貞松之高志、於言語可以免害、知志愈深。孔子曰、諾、吾将仕矣。此皆遜辞以遠害也。(義疏)

集解は注者の名を記さないから、何晏の説である。何晏の説も江熙の説も、いずれも経「邦无道、危行言遜」の「言遜」を中心に注釈を加えている。この句について集解が、「順言以遠害」(ことばを角立てないようにして害を避ける)といい、江熙は「此皆遜辞以遠害」(これはすべてことばを角立てないようにして害を避ける)と述べていて、その所説に変りはなく、表現からも、集解と通じていることが認められるであろう。その差異をいえば、何晏が「遜、順也」と訓詁を示し、その訓詁に従っているのに対して、江熙は「遜」をそのまま用いていることである。ただ江熙がこのように集解と同主旨でありながらも、さらにことばを加えていることに注目しよう。ここがそうで、集解が「厉行不随俗」(行いに注意し俗に従わない)というのに対して、「危行」については、論語「屮寒虧貞松之高志」(子罕篇)から引き、「言遜」については、「孔子曰、諾、吾将仕矣[(3)]」(陽貨篇)から引いて文を構成していることである。こうして引いてくる句は論語が多く、それによって文意をより容易に、しかも全体的に理解させる効果があるといえる。江熙のこうした注釈方法については、後で改めて問題とする。

このように江熙の説が集解と一致する例を、もうひとつ挙げる。資料(54)である。

(54)　子貢方人、子曰、賜也賢乎我夫哉、我則不暇。(憲問)

(集解)　孔安國曰、比方人也。不暇比方人也。

(江熙)　比方人、不得不長短相傾。聖人誨人不倦、豈當相臧否。故云、我則不暇。是以問師之賢、而无毀誉、長物之風於是乎。(義疏)

集解も江熙も、経の「方人」を中心に注釈を付けている。集解は孔安国の説を引いて「方人」を「比方人」と解していて、江熙もまたこの訓詁を引き継いでいる。ただ江熙の場合は、この「比方人」に対してよりわかりやすくするための補足説明を加えている。それが「不得不長短相傾」という句である。人を比べれば、当然のことながらその人についての優劣是非の結果を示さざるをえないというのであろう。こうした補足からも、江熙の説明が集解の「比方人」を下敷きとしていることは明らかである。また江熙のこの説の後半は、経の「我則不暇」について述べたものであるが、この句を導くために、前にも述べたような注釈の方法、ここでも論語であるが、論語の「誨人不倦」(述而篇)、「无毀誉」(「誰毀誰誉」衛霊公篇)を引いて説を作っていることに注目しておく。

さらに一点注意すべきことは、江熙のこの説が、旧抄本論語義疏では集解下に繋がれていることである。義疏において章末の集解下に繋がれる注釈は、繋がれている集解にかかわる場合と、章全体にかかわる場合とがある。ここは集解の「不暇比方人也」にかかわっているとも、章全体にかかわっているともとれる。江熙の説が、集解の解と同じ「比方人」から始まることから、集解にかかわる注釈とみることができるかもしれないが、述べていることは「賢乎」にも言及しているから、章全体にかかわるもので、章の主旨(「章旨」)を述べたものとみるべきであろう。

以上、資料(3)(50)(54)について、江熙の論語説が何晏の集解と内容上関連している場合、あるいは集解にそって説を発展させている場合をみてきた。江熙は、何晏の集解に異論を示すことが多いが、ここでみてきたように集解と内容上関連をもち、それを発展させている場合もあるのである。このことは、江熙の時にすでに何晏の集解が、論語の注釈書として広く通用していたことを意味し、そうして江熙は認めるべきものは認め、否定するものは否定するという方法で継承したのである。

注

(1) ここに引用する江熙の論語説は、本論考の最後に示す「江熙の論語説」に整理した資料とその番号にしたがう。

(2) 集解はここに「危、厲也」という訓詁があったはずである。

(3) 陽貨篇のこの句について、集解に「孔安国曰、以順辞免害也」とある。

二　江熙は何晏『論語集解』を注釈の対象としたか

江熙の論語説が何晏の集解と密接なかかわりを持つことは、これまでの検討から明らかになった。それはこの当時、何晏の集解がすでに一定の地位を確立し、江熙にとって批判的に継承するに値する注釈となっていたことを示す。それでは江熙は、何晏の集解に対して注釈を施す対象とみていたのであろうか。これは論語の注釈史を考える際に見過ごすことのできない問題である。というのも、江熙から大きな影響を受けている梁・皇侃は、何晏の集解を注釈の対象として『論語義疏』を撰述している。それでは皇侃は、何晏の集解を注釈の対象とすることも、江熙から引き継いだのであろうか。江熙が集解を注釈の対象としたのかどうかを考察する理由である。

一般に注釈は、対象となる語句に繋がれている。旧抄本論語義疏の記述についてみても、経文にかかわる疏は経文下に、集解にかかわる疏は集解下に繋がれている(1)。すると検討すべき対象は、集解下に繋がれた江熙の説ということになるが、旧抄本では集解下に繋がれている疏が集解にかかわる疏とは限らない。これについては、前節一の資料（54）でも触れたことであるが、形式上からは集解下に繋がれていても、内容からみると集解についての疏ではなくて、章全体にかかわる疏である場合が認められるからである。

旧抄本論語義疏について、江熙の論語説が経、集解のいずれに繋がれているか見てみると、全87条中、経文下が73条、集解下が14条で、その説の多くが経にかかわる説であると考えられる。

そこで集解下の14条について、章のどの位置の集解に繋がれているかを見てみると、14条中11条までが章末の集解下に繋がれていて、章中の集解下に繋が

れるのはわずかに3条、資料番号で示せば、(28)(54)(72)である。そこで初めにこれら3条について検討することにしよう。ただこのうちの(54)についてはすでに前節でみたように、集解にかかわる疏ではなくて、章全体にかかわる疏と判断した。そこで資料(72)を取りあげる。

(72) 子曰、古者、民有三疾、今也或是之亡也。(陽貨)

(集解) 苞氏曰、古者民疾与今時異也。

(江熙) 今之民無古者之疾、而病[2]過之也矣[3]。(義疏)

この江熙の説には文字に異同もあり、必ずしもわかりやすい文ではない。そして集解が、「古者民」を中心として解いているのに対して、江熙は「今之民」を中心として説を立てているし、両文の語句を比べてみても直接のかかわりあいはない。そうしてみると、この江熙の説は章中の集解下に繋がれてはいるが、集解にかかわる説ではなくて、総論的な位置づけをもつこの章の首句「古者、民有三疾、今也或是之亡也」にかかわって立てられた説と考えられる[4]。そうであれば、章中の集解下に繋がれていても、この(72)は集解を注釈の対象としたものとは考えられないのである。

次に章末の集解下に繋がれている江熙の説を見てみよう。資料(26)である。

(26) 子畏於匡……天之未喪斯文也、匡人其如予何。(子罕)

(集解) 馬融曰、如予何者、猶言奈我何也、天之未喪此文也、則我當傳之、匡人欲奈我何、言其不能違天而害己也。

(江熙) 言文王之道為後代之軌、已未得述上天之明[5]、必不使没也。(義疏)

集解に引かれる馬融の説は、経「如予何」について「言奈我何也」と訓釈し、その訓釈にもとづいて、経「天之未喪斯文也、匡人其如予何」部分について解釈している。それに対して江熙が、「文王之道為後代之軌」(文王の道は後の時代の軌範である)というのは、この章の「斯文」について述べたもので、説全体も経「天之未喪斯文也、匡人其如予何」にかかわるようにみえるから、章の主旨を明らかにしようとする説であるとみる。そして江熙の説の中に、集解にかかわる語句も見えないし、語句に共通点もない。ということは、江熙のこの論語説は集解下に繋がれてはいるが、章全体の主旨を論じてまとめた章旨であ

って、それゆえに章末におかれたもので、それが形式上は集解下に繋がれているだけで、集解にかかわって立てられた説ではないと判定したい(6)。さらに同じように、章末の集解下に繋がれている例を見てみる。資料（55）である。

（55） 子曰、驥不称其力、称其徳也。（憲問）

（集解） 郑玄曰、徳者謂調良之徳也。

（江熙） 称伯条曰、驥有力而不称、君子虽有兼能、而能称其徳也。（義疏）

見て明らかなように、集解に記される鄭玄の説は、「徳」についての訓詁である。それに対して江熙の説は、「徳」に言及しながらも、鄭玄の「徳」についての訓詁をふまえて論を進めているのではなくて、章全体を説き明かそうとしていることは明らかである。ここから、江熙のこの説も章旨とみるべきで、集解と直接のかかわりを持たないことがわかる。

以上資料（72）（26）（55）について見てきたが、これらの論語説は、旧抄本論語義疏ではいずれも集解下に繋がれているが、その内容から判断して集解にかかわるのではなくて、章全体にかかわるものであること、そして（26）（55）については、章全体について述べているために章末、この場合には集解下に繋がれているとわかるのである。これは前に触れた資料（54）と同じで、ここからも江熙が、集解を対象として注釈を作っていないと認めるのである。

このように江熙の説は、集解下に繋がれてはいても、その多くが章全体にかかわる章旨なのであるが、それでは集解にかかわる注釈はないのであろうか。それについて資料（12）をどのようにみたらいいのだろうか。

（12） 子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。（述而）

（江熙） 見其翹然、向善思益也。古以贄見、脩脯也。孔注虫不云脩是脯、而意亦不得离脯也。（義疏）

江熙の説中に「孔注虫不云……」とあるのは、江熙が集解を検討の対象としていることを示している。しかしここで江熙がいっていることは、孔注に対する問題点の指摘であって、注釈を付しているわけではない(7)。今問題とするのは、江熙が自らの注釈を作るとき、集解を視野においているということを認めた上で、それでなお集解に対し注釈を施す必要があると認めていたのかどうかとい

うことである。そうした視点で江熙の説を見たとき、江熙は集解に注釈を施す必要性を認めていない、と判定するのである(8)。

江熙の論語説は、集解を視野においてそれとは異なる説を構成する、あるいは集解を継承して説を発展させることはあっても、そのことと、集解に注釈を施す必要を認めていたのかどうかとを、区別しなければならないのである。

以上から、江熙の論語説は、集解にかかわって議論を展開しているが、集解を対象として注釈を作っていないことが明らかになった。

注

(1) これは旧抄本『論語義疏』で見た場合であって、敦煌本『論語疏』ではそれとは異なる。
(2) 根本本、馬本は、病字を疾字に作る。
(3) 根本本、馬本は、矣字が無い。
(4) 根本本がこの江熙の説を、経「今也或是之亡也」下に移していることも、ここでは参考となろう。
(5) 江熙の説に「上天之明」という表現がみえるが、これをどうみるか今定見がない。
(6) この問題については、「江熙の論語説と『集解論語』十巻」の四、五、六、七を参照。
(7) この問題についても、「江熙の論語説と『集解論語』十巻」の四、五、六、七を参照。
(8) このことは、江熙の当時まだ集解の表現がわかりにくいものと認識されていなかった、ということを意味しよう。
さらにいえば、江熙のこの注釈が、『集解論語』と呼ばれていることも考え合わせていいのかも知れない。

三　江熙の論語説の性格 —— 注釈の形から ——

晋代の論語説および江熙の論語説が記されていた『集解論語』10巻は、その遺文が断片的に皇侃の論語義疏に引かれて見えるだけで、集解論語そのものは早い時期に散逸してしまっている。そのため集解論語が、どのような形の注釈であったかということは、残されている断片的な遺文の中から手がかりを探し出すしか方法がないのである。江熙の論語説を読んで最初に気づくのは、注釈としての形式的な差異である。形式的な差異とは、江熙の論語説の多くが章全

体にかかわるもので、語句にかかわる注釈がほとんど見えないという点である。これは江熙の論語説のひとつの特色であろう。この問題の解明からはじめることとしよう。

1）論語説が章全体にかかわるもの

章全体にかかわる論語説とはどのようなものをいうのか、先にも部分的に触れたが、ここで改めて検討する。資料（5）を見てみよう。

（5） 哀公問曰、何為則民服也、孔子對曰、挙直錯諸枉則民服、挙枉錯諸直則民不服。（為政）

（江熙） 哀公當千載之運、而垂賢満国、挙而用之、曾其王矣。而唯好耳目之悦、群邪秉政、民心厭弃、既而苦之、乃有此問也。（義疏）

為政篇のこの章に対して、江熙が問題とするのは、なぜ哀公からこの問いが発せられたかという点である。江熙はそれを哀公の置かれた状況から説き起こす。「垂賢満国、挙而用之、曾其王矣」（聖賢が国に満ちている。それを登用できれば、魯は王たりうる）とは、哀公が目の前にいる孔子、顔回たちをなぜ登用しないのかという疑問である。哀公が機嫌取りばかり重用し、民が悪政に苦しんでいる、そこでこうした問いが生まれた、というのが江熙のこの章についての説明である。江熙の説中には、章の語句についての注釈はない。このような江熙の説明の方法を、章全体にかかわる説とみるのである。

次もまた章全体にかかわる問題を説く。資料（8）である。

（8） 子曰、人而不仁、如礼何、人而不仁、如樂何。（八佾）

（江熙） 斯貴礼条者、以可安上治民、移風易俗也。然其人存則與、其人亡則廢。而不仁之人、居得與之地、而無能與之道、則仁者之属、無斯施之、故歎之而已。（義疏）

江熙がまず問題とするのは、礼楽とは何かという問いで、それに対する答えが、「安上治民、移風易俗」（上を安んじ民を治め、風俗をよいほうに改める）である。その礼楽を行いうる人がいたとしても、「不仁」の人が権力を握っている限り、「仁者」たちにも手の下しようがない、そのことを嘆いたのがこの章であるというのが、江熙の説である。ここから明らかになることは、江熙の説はただ

その章の説明に終わるのではなくて、その章が生まれたであろう状況、すなわち孔子がこのような問いを発した状況から説いている点である。こうした江熙の説明の方法もまた、章全体にわたる説とみる。

資料（62）は次のようである。

（62） 子曰、叟君敬其叟而後其貪。（衛霊公）

（江熙） 恪居官次、叨達其道、叟君之意也。蓋傷眈利禄、以叟君之也。（義疏）

一章が短文であるため、江熙の説は章末に繋がれている。江熙が明らかにしようとするのは、この章がどのような状況の中で発せられたかという点である。そこでまず「恪居官次、叨達其道」（心をこめて官途に務め、その目的を達成する）といって、君に仕える時のあるべき姿を述べ、次いでこの時代がそのようになっていないことを嘆く文である、と説明する。これもまた章全体についての説明である。

資料（51）を見てみよう。

（51） 子曰、貧而无怨、難、

（江熙） 顔原无怨、不可及也。

冨而无驕、易。（憲問）

（江熙） 若子貢不驕、猶可能也。（義疏・正義）

ここには江熙の説が二箇所に分かれて記されていることから、それぞれ語句についての注釈と見えるかもしれないが、「无怨」に顔淵・原憲、「不驕」に子貢を結びつけ、それが「不可及也」（できない）、「猶可能也」（できるかもしれない）と判断を下していることからみて、章全体を説いているのであって、語釈ではない。

こうした例はこれ以上挙げないが、江熙の説は、その多くがこのように章全体にかかわるもの、すなわち章旨なのである。

２） 論語説が語句にかかわるもの

前節で章全体にかかわる論語説について検討した。するとそれらの説の多くが、旧抄本論語義疏では、章末に繋がれているのである。この点は、これまで

もたびたび指摘しているように、旧抄本論語義疏の編者が、章全体にかかわる注釈であると認めて章末に繋いだものと考えられる(1)。この点は、集解下に繋がれている注釈14条についてみても、形式上集解下に繋がれているが、その多くが集解にかかわるのではなくて、章にかかわるものなのである。こうした点を傍証として、江熙の説の多くが、章全体にかかわるものであるとみるのである。

それでは江熙の論語説に、語句を解した説はないのであろうか。たとえば郷党篇につけられた次の例はどうであろうか。

(31) 君召使擯、色勃如也、足躩如也。(郷党)

(江熙) 不暇閑歩、躩、速貟也。(義疏)

(32) 揖所与立左右其手、衣前後襜如也。(郷党)

(江熙) 揖両手、衣裳襜如動也。(義疏)

(33) 不吃不食。(郷党)

(江熙) 不吃、謂生非其吃、若冬梅李実也。(義疏)

ここにあげた郷党篇の三例は、明らかに「躩」「揖両手」「不吃」という語句についての注釈である。これらの語句に注釈が付されていることは、あるいは郷党篇という、特異な語彙が出てくる篇であることによるのかもしれない。ところで、次のような形式の注釈はどうであろうか。資料(69)である。

(69) 子曰、小子、何莫学夫詩、詩可以興……迩之叀父、遠之叀君、多識於鳥獣草木之名。(陽貨)

(江熙) 言叀父与叀君、以有其道也。(義疏)

この江熙の説は、語釈ではないが、「迩之叀父、遠之叀君」という句について、この句が示していることがらを補足する形で、「以有其道也」(それぞれその方法がある)という一句が加えられている注釈である。その点では、句を取りあげた注釈であって、章全体にかかわる注釈ではない。また次の資料(79)はこのようである。

(79) 子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣。(子張)

(江熙) 但言若是自可也。(義疏)

江熙のこの注釈は章末に記されていて、経の「其可已矣」と対応して、この句

の示すことがらを明かしたもので、章の全体にわたるものではない。ただそれにしても、この江熙の説はあまりに簡単である。この説の前に「如上四叉為士、如此則為可也」という疏があることからみて、前の疏との重複を避けて、あるいは書き改められているのかもしれない。仮にそのようにみても、この江熙の説は、最後の句だけにかかわるもので、章全体にかかわるのではない。

このようにみてくると、江熙の論語説にも、難解な語あるいは文意を補足する場合には語釈が作られているし、句だけを対象とする注釈も作られていることがわかる。江熙の論語説をみたとき、章全体にかかわる注釈が多く、あるいはすべてが章全体にかかわる注釈であるかと思われるが、そうではないことが判明した。

以上から、江熙の論語説の特色として、章全体にかかわる説が多いこと、しかし場合によっては、難解な語や句には注釈が作られているといえる。ただそのなかに訓詁的な注釈はみることができない。

注

(1) 論語義疏については、敦煌本論語疏と旧抄本論語義疏との異なる形式のテキストが存在する。わたしは敦煌本の形式が古く、旧抄本の形式は新しいものと考える。二つの論語義疏についてその先後は推定できても、それぞれが何時ころどのように分離していったのかなどはまったく不明である。そこで旧抄本論語義疏について、編者の存在を想定してこのように記したまでで、具体的なことが明らかになっているわけではない。旧抄本論語義疏で江熙の説が、1章のどの位置に繋がれているかをやや詳細に整理して記すと、以下のようである。江熙の説87条中、集解下に繋がれているのが14条である。残る経文下に繋がれている73条中で、江熙の説が一章中に1条記されるもののうち、章末に記されるのが46条、章中に記されるのが12条である。また一章中に2条記されるもののうち、章中と章末に記されるのが10条、2条ともに章中に記されるのが2条、残る4条は郷党篇に記される説である。郷党篇の4条は、その文の性格上、章中、章末を決めることができない。こうしてみてくると、経文下に繋がれている江熙の説のうち、56条が章末の経文下に繋がれていることがわかる。このことは、江熙の説が章全体にかかわるものであるために章末に繋がれる場合が多い、ということになろう。

四　江熙の論語説の性格 ── 修辞的視点から ──

1）文献を引いた論証

江熙の論語説の中には、あまり多くはないが、その説中に書名を記して文献を引く場合がある。引かれる文献は、『礼記』、『易』、そして董仲舒の「対策」である(1)。まず礼記を取りあげる。資料（73）である。

（73）　子貢問曰、君子亦有悪乎。（陽貨）

（江熙）　君子、即夫子也。礼記云、昔者仲尼与於蜡賓、旣畢出、喟然而歎。言偃曰、君子何歎乎。（義疏）

「礼記云」より文末「君子何歎乎」までが『礼記』「礼運」からの引用で、字句は今見る礼運とほとんど変わらない。江熙の説で注目したいのは、この章の「君子」を、「夫子」すなわち孔子を指すと解していることである。集解はとくにこの問題には触れないし、江熙の説の直前に記される義疏には、「旧説、子貢問孔子曰、天下君子之道有斯憎疾叹不乎」とあるから、義疏に引かれる旧説では、この「君子」を「天下の君子」とみているようである。すると「君子」を「孔子」とする解釈は、江熙から始まることがわかる。そして江熙がここに引いた礼記を見ると、はじめに「仲尼与於蜡賓」（仲尼は蜡祭に参加した）とあって、その後に「君子何歎乎」（君子は何を嘆いているのか）とあるから、「仲尼」と「君子」が同一人物であることを示している。つまり江熙が「君子、即夫子也」に続いて礼記のこの文を引いていることは、自らの説の論証の根拠として引いているにちがいない。そしてその解釈を認めさせるためには、確かな根拠があったほうがいいと考えたのではなかろうか、そのための拠りどころとなっているのがこの礼記礼運なのである。

同じく礼記を引く資料（40）は、次のようである。

12　（40）　司馬牛問仁、子曰、仁者其言也訒……子曰、為之難、言之得無訒乎。（顔淵）

（集解）　孔安国曰、行仁難、言仁亦不得不難矣。

（江熙）　礼記云、仁之為器重、其為道遠。挙者莫能勝(1)、行者莫能致也。

勉於仁者、不亦難乎。夫易言仁者、不行之者也。行仁然後知勉仁為難、故不敢軽言也。（義疏）

冒頭「礼記云」より「不亦難乎」までが『礼記』「表記」からの引用で、表記には「行者莫能致也」下に、「取數多者仁也夫」という一句が多い。経「子曰、為之難、言之得無訒乎」に、江熙の時さまざまな解釈があったことは義疏から知られる。それを整理すると、①集解の説「仁を行うことは難しい、仁を口にすることもまた難しいことだ」、②義疏の説「事を行うのは易くはないから、ことばも慎まなければならない」、③義疏の[一云]説「仁を行うことが難しいからには、仁を口にすることも難しい」。以上のような三説に対して、江熙の説はそのいずれとも違って、軽々しく仁を口にする人は仁を行っていないからであり、仁を行って、仁につとめることの難しさを知れば、軽々しく仁を口にすることはできない、と説明する。そして自説の正しさの根拠となるのが、礼記から引いた「仁之為器重、其為道遠。挙者莫能勝、行者莫能致也。勉於仁者、不亦難乎」（仁は器として重く、道として遠い。挙げることはできないし、行き着くこともできない。仁に努めることは難しいではないか）という一句なのである。

易の引用は資料（77）で、次のようである。

（77） 長沮桀溺耦而耕、……子路行以告、夫子憮然、曰、鳥獣不可与同群也、吾非斯人之徒与而誰与、天下有道、丘不与易也、（微子）

（江熙） 易称天下同帰而殊塗、一致而百慮。君子之道、或出、或處、或黙、或語。所以為皈致者、期於内順生徒、外啓教旨也、惟此而已乎、……。（義疏）

『周易』「繋辞伝」下からの引用、「天下同帰而殊塗、一致而百慮」（同じ目的地でも道筋が異なり、同じ結果でも考えが異なる）部分である。江熙の説は長文なので、易とかかわる初めの部分だけを示した。この江熙の説が特異なのは、結語の次の部分であろう。

蓋物之有道、故大湯武、亦称夷斉、由管仲而无譏卲忽。今彼有其道、我有其道、不執我以求彼、不係彼以易我、夫可滞哉。

この文で江熙がいいたいことは、道を執り行うものであるならば、孔子は湯武、管仲を賞賛すると同時に夷斉、卲忽をも否定することはないということである。

それを経との関連でいえば、道を行うという点で、孔子と長沮桀溺とをそれぞれ他者を認めあう関係として解することになる。江熙のこの解釈が、当時いかに他と異なっていたかということでいえば、義疏に見える沈居士が、自説を述べた最後に「大湯武、而亦賢夷斉、美管仲亦不譏卻忽」と、江熙の説をそのまま引いていることからも分かる。ここから、江熙はなぜ易のこの文を引いたかということが見えてくる。易の「同帰而殊塗、一致而百慮」とは、まさに孔子と長沮桀溺との道の異なりを認めることである。江熙は易のこの句を拠りどころとして、「君子之道、或出、或處、或黙、或語」（君子の道というものは、さまざまに異なる形をとる）という自らの解釈に導こうとしたのであろう。

資料（61）は、董仲舒の説を引く。

（61） 子曰、君子謀道、不謀食……君子憂道、不憂貧。

（集解） 郑玄云、餒餓也、言人雖念耕而不孝、故飢餓、孝則得禄、虫不耕而不飢餓、勧人学也。（衛霊公）

（江熙） 董仲舒云、遑〻求仁戈。常患不能化民者、大人之意也。遑〻求財利、常恐匱乏者、小人之意也。此君子小人謀之不同者也。慮匱乏、故勤耕、恐道闕、故勤孝。耕未必无餓、孝亦未必得禄、〻在其中、恒有之勢、是未必。君子且當存大而遺細、故憂道不憂於貧也。（義疏）

董仲舒の引文は「小人之意也」までであろう(2)。江熙はこの董仲舒の説「大人之意・小人之意」を拠りどころとして、「此君子小人謀之不同者也」（これが君子と小人との考えの異なる点である）という論へと展開させていく。この章では、「君子」について述べても「小人」には言及しないし、また集解に引く鄭玄の説は、「人」の行為と解して、君子・小人へと結びつけてはいない。それに対して江熙は、君子・小人と対比させてこの章を説明しようとしている。そのためには、自らの説明を根拠づける何らかのよりどころ、君子・小人の行為を対比した文献の存在が、他者を納得させるのに好都合である。その時選ばれたのが、この董仲舒の説なのではないだろうか。

江熙はさらに論衡に類似した一文を引いているので、それをみてみる。資料（37）である。

（37） 顔渕死、顔路請子之車以為之椁、……以吾従大夫之後、吾以不可徒行。（先進）

（集解） 孔安国曰、鯉、孔子之子伯魚也、孔子呎為大夫、故言、吾従大夫之後、不可以徒行、是謙之辞也。

（江熙） 不可徒行、距之辞也。可則与、故仍脱左驂賻於旧館、不可則距、故不許路請也。鯉也无椁、将以悟之、且塞厚葬也。（義疏）

ここではとくに論衡と書名は記していない。しかし「可則与、故仍脱左驂賻於旧館」という部分は、明らかに『論衡』「問孔」篇に見える、衛で前日宿った人の喪にそえ馬を外して与えた話「子貢曰、於門人之喪、未有所脱驂、脱驂於旧館、毋乃已重乎」をふまえたものであろう。ここで、江熙は馬を与える場合と与えない場合を並列しているが、それは論衡にもとづいてこの注釈を作ったことを示している(3)。

ところで論衡からのこの引文の形は、礼記、易、董仲舒などの場合とは異なっている。それは礼記、易、董仲舒の引文が、自説の論証のための根拠としているのに対して、論衡の引文は、注釈の中に組み込まれていて、論証の根拠ではない。そして論衡と書名を記していないことを考え合わせると、論衡は礼記、易、董仲舒とは異なった用いられ方をされているといえる。

礼記、易、董仲舒、論衡と文献を引くのは、合わせてわずか5例である。しかし論衡を除いて、これらの文献の引用には、はっきりした目的があり、それは、江熙がそれまでになかった新しい説を立てた時、書名を明記した文献を論証の根拠として引いてくるということである。

注

(1) 礼記については資料（40）（73）に、易については資料（77）に、董仲舒については資料（61）にみえる。

(2) 董仲舒のこのことばに類似した文が、『漢書』「董仲舒伝」第26に以下のように見える（田中理恵さんのご教示による）。

夫皇皇求財利、常恐乏匱者、庶人之意也、皇皇求仁義、常恐不能化民者、大夫之意也。

この文は「册曰」として引かれるから、彼の対策であろうが、義疏の引用と比べると異なりがある。礼記、易などは、江熙の引用と今見るテキストとそれほどの違い

はないが、董仲舒のこの引文については、どうしてこのような違いが存在するのであろうか。経書はテキストとして確立していたからであろうか。

(3) 江熙の説の末尾の「塞厚葬」(厚葬をやめさせる) は、同じ先進篇の「門人厚葬之」章によるのであろう。

2) 論語を引いた論証

江熙の論語説の特徴の一つとして、論語を引いて説を構成する場合がしばしば目につく。これについてはすでに資料 (50) (54) でも触れた。ここであらためて論語説に論語を引いた例を挙げて、その引用がどのような効果をあげているのか見てゆこう。論語の引用の場合、前節で検討した礼記や易と違って、書名、篇名を記さないことである。この点については、後でまた触れる。まず資料 (17) でみてみよう。

(17) 子曰、天生徳於予、桓魋其如予何。(述而)

(江熙) 小人為悪、以理喩之、則愈凶強。晏然待之、則更自処。亦猶匡人聞文王之徳而兵解也。(義疏)

ここに挙げた江熙の説の後半部分「匡人聞文王之徳而兵解」(匡人は文王の徳を聞いただけで兵を引いた) は、論語子罕篇「子畏於匡、曰、文王既没、文不在茲乎。……天之未喪斯文也、匡人其如予何」にもとづいて、江熙が書き換えたものであろう。論語説の構成は、その前半で、「理」で諭そうとすると、ますます「凶」が強まる。解決する方法は、相手に逆らわず対応することであるといって、子罕篇にもとづく「匡人聞文王之徳而兵解」をこの章の結語としているのである。ただこの江熙の説には、「晏然待之、則更自処」(ありのまま対応すればおのずと処置する) というように、能動性を否定する考えが根底に存在するようであるから、当時の老荘的な思考の影響を受けているのかもしれない。この章の「桓魋其如予何」と、子罕篇の「匡人其如予何」という共通する表現が、子罕篇を引いてくるきっかけであるのかもしれないが、このように論語を引いてくることは、それによって論に説得性を増し、文意の理解が容易になる効果を生むはずである。次に資料 (19) を見てみよう。

(19) 子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。(述而)

(江熙) 復礼一日、天下皈仁、是仁至近也。(義疏)

ここに挙げた江熙の説の「復礼一日、天下皈仁」は、論語顔淵篇冒頭「顔淵問仁。子曰、尅己復礼為仁、一日尅己復礼、天下帰仁焉、……」にもとづいて書き換えたものである。顔淵篇のこの文を引いてくる理由は、「仁至」と「帰仁」という「仁」へ到達する道筋を述べた章と見たからであろうか。同じく「仁」にかかわる文を用いていることで、通じ合う主旨の章との関連を示し、それによって論旨は、分かりやすさを増すのである。次に資料（75）を見てみよう。

（75） 斉人帰女樂、季桓子受之、三日不朝、孔子行。（微子）

（江熙） 夫子色斯挙矣、无礼之朝、安可以処乎也。（義疏）

江熙の説の冒頭「色斯挙矣」は、郷党篇の同じ文をそのまま用いている。この「色斯挙矣」は、文のつながり、あるいは解釈にしても、説の分かれるところである。その集解に、「馬融曰、見顔色、不善則去之也」（顔色を見て、正しくなければ立ち去る）とあり、義疏も「謂孔子在處、観人顔色、而挙動也」（孔子はその場所で人の顔色を見て行動する）とあることからも、江熙はこの句を「（何かに反応して即座に）立ち去る、行動を起こす」と解しているのであろう。江熙は、「孔子行」という句の解釈に郷党篇のこの句を用いることで、郷党篇での用いられ方と、ここでの文意とが相乗的に作用して、その結果、「三日不朝、孔子行」という句が、注釈を読んだ人にとって直感的に理解できるという効果をあげているはずである(1)。

さらにまた直接論語の句を引いているわけではないが、次のような形もひとつの論語からの引用といえるであろう。

（51） 子曰、貧而无怨、難、

（江熙） 顔原无怨、不可及也、

冨而无驕、易。（憲問）

（江熙） 若子貢不驕、猶可能也。（義疏・正義）

「貧而无怨」の人として、孔子の弟子の中から顔淵、原憲をあげ、「冨而无驕」の人として、子貢をあげる。このように人物で示す注釈は集解にも見えないが、江熙の当時、孔子の弟子たちに一定の評価を伴う形象が形づくられていたから、それをここに借りてきているわけで、こうした江熙の方法もまた注目に値する。後に邢昺が、江熙のこの二条を正義の中に引いたことは、邢昺もまたこの注釈

に注目していたのであろう。このような孔子の弟子の評価を注釈に用いることも、形を変えた論語の引用といえるであろう。

以上検討した資料（17）（19）（75）（51）は、いずれも論語の文を引いてきて、自らの論語説を組み立てている例である。その狙いは、論語の関連する句を引いてくることで、ことがらが相乗的に通じ合い、論旨が理解しやすくなるという効果を生み出しているはずである。初めに触れた、論語の篇名を記さずに引くことは、こうした文が周知の文であるということばかりでなく、文の構成要素として使われていることが理由になるのであろう。その点では、先に触れた論衡の使われ方と通じるものである。

江熙がその論語説に、論語の句を引いている例は多い。今気づいている個所をあげると、資料（２）（14）（48）（49）（50）（54）（67）（71）などあるが、そのいちいちの検討は省略する。

注

(1) この「色斯挙矣」は、これまでも難解な句として解釈が定まらない句である。集解はここに引いたように前の句に続けるが、集注は鳥の動作を示すとして後ろの「翔而後集」に続け、「言鳥見人之顔色不善、則飛去、回翔審視而後下止」（鳥は人の態度が不穏なので、飛びあがり、旋回してよく視てから木におりたった）と注する。ところで江熙がこのように引いて用いていることは、当時この句に誰でも理解しうる一定の使われ方があったのであろう。こうした句が江熙によってどのような文脈で用いられているかということが、解釈を知るひとつの手がかりとなるのである。

３）俗諺を用いた論証

江熙の論語説の特徴の一つとして、俗諺を巧みに用いて論旨を分かりやすくする表現がある。そうした例として、資料（58）を見てみよう。

(58)　子曰、君子疾没世而名不称焉。（衛霊公）

18　（江熙）　匠終年運斤、不能成器、匠者病之。君子終年為善、不能成名、亦君子病之也。（義疏）

江熙の論は、この章の章旨を説いたものである。君子が生涯かけてもその名声をたたえられるに至らないと嘆く、そのことをたとえて、「匠終年運斤、不能成

器、匠者病之」という句を引いてくる。器物を作る木工が、生涯かけてノミを振るっても思うような器物を作れないと嘆くことにたとえるのである。江熙にとって「君子」とは、「匠」と同じように、ある一つの分野で優れた能力を発揮する人と考えるのであろう。江熙が、「君子」にたとえて「匠」の苦心を例として挙げることは、たんにことがらを理解させやすくするためばかりでなく、社会における人間関係の位置づけ、職業の貴賤を差別しない特異な視点を見てとることができる、と読むのは読みすぎであろうか。

次に資料（74）を見てみよう。

（74） 斉景公待孔子、曰、若季氏則吾不能、以季孟之間待之、曰、吾老矣、不能用也、孔子行。（微子）

（江熙） 麟不能為豺歩、鳳不能為隼撃。夫子斯陳、必正道也。景公不能用、故託吾老。可合則徃、於离則去、聖人無常者也。（義疏）

斉の景公に対する孔子の応対について、江熙は説の初めに「麟不能為豺歩、鳳不能為隼撃」（麒麟はヤマイヌのような歩みはできないし、鳳凰はハヤブサのような攻撃はできない）という俗諺を用いて、立場の異なる二つのものが妥協することはありえないということを示す。表現から考えると、これは俗諺として当時一般に用いられていたものであろう。一見なじまないように見えるこうした俗諺を論語解釈に取り入れていることは、江熙の文章意識が、通俗的なものをも拒まない巾の広さを持っていたことを示しているのではなかろうか。これによって、論語説の文意をわかりやすくし、読むものにとって論旨を瞬時に納得させる効果をもたらしている。次に資料（87）を見てみよう。

（87） 孔子曰、不知㝵無以為君子也、不知禮無以立也、不知言無以知人也。（堯曰）

（江熙） 不知言、則不能賞言、〻〻〻〻、則不能量彼。猶短綆不可測於深井、故無以知。（義疏）

この説は、「不知言無以知人」だけの注釈であろう。相手のことばを理解できなければ、相手を知ることはできないというたとえとして、「短綆不可測於深井」（短い綱では井戸の深さを測れない）という。これに類似した表現として、『荀子』「栄辱篇」に「短綆不可以汲深井之泉」（短い綱では深い井戸の水は汲めな

い）とある。井戸の深さを測るのか、井戸の水を汲むのか、この表現の違いは、あるいは江熙がこの章の文意によって改めたものかもしれない。典拠としては古くから見えるものであろうが、ことがらとしては民間の生活の場から生まれた俗諺で、それが広く民間に通用していたものであるに違いない(1)。さらに次のような俗諺も見える。資料（41）である。

（41） 哀公問於有若曰、年飢用不足如之何……對曰、百姓足,君孰与不足、百姓不足、君孰与足。（顔淵）

（江熙） 為家者与一家倶足、乃可謂足、豈可足已、而謂之足也。夫倹以足用、寛以愛民、日計之可不足、而岁計則有餘、十二而行、日計可有餘、岁計則不足、行十二而不足。不思損而益、是揚湯止沸、疾行遁影、有子之所以發徳音者也。（義疏）

説の末尾に、「揚湯止沸、疾行遁影」（お湯をかきまぜて沸騰を止め、疾走して影を追いかける／できないこと）とある。この句の前半「揚湯止沸」は、『後漢書』「董卓伝」に見える、「揚湯止沸、莫若去薪」（お湯をかきまぜるより、まきを取りだすがいい）として用いられる俗諺の、後半部分を省略した表現であろう。とすれば「疾行遁影」も、「疾行遁影、莫如追人」のように用いられていた俗諺で、それを論語説中に用いているのであろう。次を見てみよう。資料（52）である。

（52） 子曰、晋文公譎而不正、斉桓公正而不譎。（憲問）

（集解） 馬融曰、伐楚以公戈、責苞茅之貢不入、問昭王南征不還、是正而不譎也。

（江熙） 言此二君覇迹不同、而所以翼佐天子、以綏諸侯。使車无異轍、昏無異文也。（義疏）

この注釈の末尾「車无異轍、昏無異文」は、『史記』「秦始皇本紀」に見える「車同軌、書同文字」と同旨の組み合わせであるが、ここでの用法は、天下を公平にする、ということのようである。

江熙の論語説中には、この他にも資料（３）「勞役居前、酒食処後」、（10）「錐刀之末、将尽争之」、（16）「以清波濯彼秕心」、（18）「逐波流遷、若影无持係索」、（49）「以肉餧虎、徒弃而已」、（83）「投人夜光、鮮不案劒」などという俗諺が見

えるが、注釈中における働きはこれまで述べたことと類似するから、いちいちの検討は省略する。

江熙の論語説の中に見えるこれらの俗諺は、日常のきわめて卑近なことがらが使われていて、論の進め方を平易に分かりやすくしようとつとめていることが見てとれるのである。とりわけ「君子」と「匠」とを併称している例からは、江熙の思考のありようをうかがうことができるであろう。

注

(1) この俗諺は、『荘子』「至楽」篇にも「褚小者不可以懐大、綆短者不可以汲深」などと見え、また詩句などにも広く見えるから、江熙も、民間に通用していたものを直接注釈の中に取り入れたという意識はないと考えるほうが、正しいかもしれない。

4）比喩を用いた論証

先にも触れたが、江熙は憲問篇「子曰、貧而无怨、難、富而无驕、易」の注釈で、論語からこの章の主旨を代表する人物、顔回・原憲・子貢を引いてきて、「顔原无怨、不可及也」「子貢不驕、猶可能也」と記していた。注釈はことがらを示す代表的な弟子三人を挙げることによって、具体化されてわかりやすいものとなっている。これは一種の比喩といえるだろう。そうした手法はほかにもある。資料（14）を見てみよう。

(14) 子在斉聞韶樂、三月不知宍味、曰、不暑為樂之至於斯也。（述而）

（江熙） 和璧与瓦礫斉貫、卞子玵以惆悵、虞韶与郑衛比響、仲尼玵以永嘆、一眓忘、何遠情之深也。（義疏）

「韶樂」のすばらしさが見逃されていたことを示すために、「和璧」が「瓦礫」とみなされて、卞子が悲しんだ故事を冒頭に置き、その「和璧」「瓦礫」と「卞子」を、「虞韶」「鄭衛」と「孔子」とに対比させることで、孔子が強く心を動かされたさまを描く。注釈をこのような故事で構成している点に注目したい。

また陽貨篇の「穿窬之盗」については、比喩として示されるのは「狗盗」である。資料（70）である。

(70) 子曰、色厉而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盗也与。（陽貨）

（江熙） 田文之客能為狗盗、穿壁如踰而入、盗之密也、……今夫子又若

為之喻、明免者鮮矣。傳云、篳門珪窬也。（義疏）

ここでの江熙の説明の大半は「穿窬之盜」に当てられていて、田文の狗盜の話が比喩として引かれ、その末尾に、「今夫子又若為之喻、明免者鮮矣、傳云、篳門珪窬也」と記される。この「傳」は左伝襄公10年の文。左伝では王叔と伯輿が争って、伯輿の宰のことばとして、「篳門閨竇之人而皆陵其上、其難爲上矣」（身分の低いものが上を侵す、上になれるものか）として引かれる。江熙はこの後半句を省略して「篳門珪窬」（身分の低いもの）を引くことで、「明免者鮮矣」（のがれられるものは少ない／むずかしい）ということのたとえとして用いているのであろう。

また陽貨篇「汝聞六言六蔽」章の「好信不好学、其蔽也賊」について、江熙は「尾生」と「宋襄」の二人を取りあげる。資料（68）である。

（68） 子曰、由、汝聞六言六蔽矣乎、……好信不好学、其蔽也賊。（陽貨）

（江熙） 尾生与女子期、死於梁下、宋襄与楚人期、傷泓、不及信之宮也。（義疏）

「尾生」は女性と橋の下で会うことを約束して、川が増水してもその約束を守って死んだ人であるし、「宋襄」は楚との戦いで、一方的に仁義の戦いを守って大敗し、泓水で傷を受けて死んだ宋襄公である。このように、ただひたすら信だけを守って判断力を学ぼうとしないことの弊害を説き明かすのに、よく知られた故事を比喩として用いることによって、注釈はわかりやすさと説得性を増している。また資料（10）を見てみよう。

（10） 子曰、能以禮讓為国乎、何有。（里仁）

（江熙） 范宣子讓、其下皆讓之、人懐心、則治国易也。（義疏）

この章の主旨は「禮讓」である。集解も義疏も「禮讓」についての注釈を付していない。ところが江熙は、この「禮讓」について「范宣子」の例を示してここに注釈を付している。范宣子の「禮讓」にかかわる事跡は、左伝襄公13年に見える。晋の中軍将の荀罃が亡くなった。そこで中軍佐である范宣子を昇格させようとしたが、范宣子は荀偃が年長であることを理由に中軍将の地位を荀偃にゆずり、自分はそれを補佐した。これを左伝は「君子曰、讓、禮之主也。范宣子讓、其下皆讓」と評価していて、江熙は左伝の「君子」のことばをそのま

ま注釈に用いている。ここで江熙が「范宣子譲」(范宣子はゆずった）と記すことは、まさに経「以禮譲為国」(礼譲で国を治める）の注釈としてふさわしい例となったのである。

このように江熙の説は、周知のことがらを引いてそれを比喩として理解の助けとする。こうしたわかりやすさが、江熙の説の特色といえるのである。

5）対句を用いた表現

江熙の論語説の特長を探ってきた。最後に触れておきたいのは、論語説の表現方法である。その例を資料（13）で見てみよう。

（13） 子謂顔淵曰、用之則行、舎之則蔵、唯我与尒有是夫。(述而)

（江熙） 聖人作則賢人佐、天地閉則賢人隠、用則行、捨則藏也。唯我許尒有是分者、非聖无以尽賢也。(義疏)

江熙の説の冒頭「聖人作則賢人佐、天地閉則賢人隠」(聖人が動けば賢人が助け、天地が閉ざされれば賢人が隠れる）は、文字数、文の構造すべて対の表現となっていることに注目したい。この章に対する注釈として、孔子と顔淵との関係は、「聖人作則賢人佐」とだけいえばいいはずであるが、それに「天地閉則賢人隠」という一句を加えることによって、文の流れにたんなる注釈とは異なる表現の安定さを加えて、次の「用則行、捨則藏」という文へと導くのである。江熙は、経文中の「用」あるいは「舎」という動作の行為者を明らかにしたいと考えたのであろう、そこでこの章が孔子と顔淵との対話であることから、「聖人作則賢人佐、天地閉則賢人隠」という句を冒頭に置いた。このように表現としては整っているのであるが、問題がないわけではない。それは「聖人作則賢人佐」の対句となっている「天地閉則賢人隠」という句である。行文上では表現の安定さを増しても、ことがらとして「聖人作」と「天地閉」とを対比させることは、ここになじまない違和感を与えるのである。これはあるいは江熙の論語説の特徴で、経の述べていることがらの範囲をこえた説明を行おうとしているということができるのかもしれない。「天地閉」は、対句を構成する必要からここに持ち出したのか、あるいは当時の思想状況を反映したものであるのか(1)。次に資料（20）を見てみよう。

（20） 子曰、君子坦蕩〻、小人長戚〻。（述而）

（江熙） 君子坦尓夷任、蕩然无私、小人馳競於栄利、耿介於得失、故長為愁府也。（義疏）

ここは、経文の「君子」「小人」についての対句の表現を、そのまま注釈に表現した行文となっている。そして様態を示す「坦蕩蕩」「長戚戚」という表現が、「坦尓夷任、蕩然无私」（広々として、こだわりがない）、「馳競於栄利、耿介於得失」（栄利をきそい、得失をはっきりさせる）と書き換えられて、よりイメージを具体化する。その限りでは表現に注意が払われているといえるのであるが、ただこのように書き換えられたことによって、「君子」「小人」の様態、道徳性を示している文脈が、「无私」「栄利・得失」という人間の個人的利害に根ざす表現に変わってしまったように考えられるのである。

また資料（30）のような表現もある。

（30） 子在川上曰、逝者如斯夫、不舎昼夜。（子罕）

（江熙） 言人非南山、立徳立功、悦仰叵過、臨流与懐、能不慨然。聖人以百姓心為心也。（義疏）

冒頭「人非南山」という句でもってこの章の章旨を示し、それに続けて四字句「立徳立功、悦仰叵過、臨流与懐、能不慨然」を置いて、結語「聖人以百姓心為心」へとつなげている。この文も四字句を基本として整った表現の行文である。しかし経文が水の流れを記して時間の経過を述べるのに対して、江熙は人が徳・功を立てることにあくせくする中で時間が過ぎてゆくことを嘆き、聖人に「百姓心為心」（民衆の心を心とする）とする結語に導いている。このことは、先にも触れたように、江熙の論語説のひとつの特徴として挙げた、経文の範囲内の注解ではなくて、意図的にその範囲をこえて注解を行った結果であるということになろう。

このように見てくると、江熙の注釈には表現上、さまざまな工夫が施されていることがわかるが、ただその結果、表現にとらわれてしまって、示すことがらが章の示す枠をこえている。この点を注釈の表現を整えたがために生じた問題と捉えるのか、それとも江熙の論語説の優れた点とみるのか、こうした問題については改めてみてゆくことにしよう。

注

(1) 論語の中には、もちろん「天地」という語彙は見えない。あるいは江熙の当時には、「天地」が「聖人」と同意義で用いられていたのであろうか。

まとめ

本稿では、最初に江熙の論語説と何晏の論語集解との比較から始めた。江熙の論語説で注目されるのは、何晏の論語集解に対する批判であるが、批判ばかりでなく、集解を認め、それにもとづいて主旨を深めている場合もある。江熙はこのように集解を批判的に継承したが、しかしまだ注釈の対象とはしていなかった。この点については、何晏の集解と江熙の論語説とを比較することによって明らかにした。次いで論点を江熙の論語説の解明に進めた。彼の論語説は、章全体にかかわる「章旨」が中心であること、しかし中に語句についての注釈も見えることを明らかにした。また江熙が従来になかった説を立てる際には、文献を引いて根拠としていること、論語を説中に用いて相乗的にことがらを分かりやすくさせていること、また論旨に説得性を持たせ理解をより効果的にするために、俗諺や比喩を多用していること、文を形式的に整えていることなどをその特色として指摘する。